

# 爪切りの心理学に向けた基礎的検討

松本 光太郎

## 要約

この論文の目的は、爪切りが心理学における有望な切り口であることを提示して、今後展開する「爪切りの心理学」の基礎を作ることである。前半部では爪切りの基礎的要件について検討した。はじめに、爪の機能的成り立ち、爪特有の時間性の2点を通して、爪の成り立ちについて検討した。次に、手の系統発生、手の個体発生、手と身体の関係、左右の成立の4点を通して手の成り立ちについて検討した。そして、2者が重なり合うこと・重なり合わないこと、痛みの共有の2点を通して他人の存在について検討した。後半部では、爪切りの一般的傾向についての知見を得るために、大学生を対象に実施した爪切りのアンケート調査について、現在の爪切り、過去の爪切り、将来の爪切りに分けて結果の報告と考察を行った。最後に、今後の「爪切りの心理学」の展開可能性について述べた。

## 1. はじめに

爪切りの心理学は、爪切りという行為に注目する。心理学が人の心の成り立ちについて探究する学問だとすると、爪切りは心の成り立ちを明らかにする有望な切り口であると筆者は考えている。この論文の目的は、爪切りが心理学における有望な切り口であることを提示して、今後展開する「爪切りの心理学」の基礎を作ることにある。

はじめに、爪切りに注目した経緯について記したい。個人的な経験から始めることをお許しいただきたい。5年ほど前だったのだろうか、京都にて2ヶ月に1度開催される研究会に筆者は参加していた。その研究会でのやりとりのなかで、介護に携わっているNさんが「お年寄りの爪を切って生活できないかなと考えることがあります。お年寄りにとって爪を切るのは誰でもいいわけではないんです。爪切りだけで生計を立てるのはむずかしいかな～」というご自身の抱く願望について話をした。「爪切りで生計を立てる」というNさんの奔放な発想に、発想の幅が偏狭な筆者は面食らった覚えがある。とはいえ、Nさんの話が爪切りの心理学を筆者が構想するきっかけとなった。

爪切りに注目した経緯がもう一つ思い当たる。それは、2007年認知症高齢者の爪を深く

切ったことで虐待が疑われ、福岡県北九州市の病院に勤務する看護師が傷害罪で逮捕（後に無罪確定）されたことである。事の顛末は他稿（たとえば、荒井（2010））に委ねるとして、この出来事を受けてあらためて気づいたことが2点あった。1点目は、私たちが普段当たり前に行う爪切りによって罪に問われかねない点である。爪切りという日常の営みが罪に問われる危機的（Critical）な事態であることの認識が筆者にはなかった。2点目は、高齢者が看護師に爪を切ってもらっていたことである。あらためて筆者自身の経験を振り返ってみると、特別養護老人ホームで行っている研究の記録には筆者が入居者の爪を切っていた記録が残っていて、その一方で筆者自身の爪は現在自分で切っている。このように、この出来事を知るまで、生涯を通して爪切りの担い手が変わっていくことに筆者は気づいていなかった。

以上のことが主なきっかけとなって、爪切りに注目するようになった。それでは、次の章から爪切りが心の成り立ちを明らかにする有望な切り口であることを示していこう。

## 2. 爪切りの基礎的要件

図1を参照しながら、爪切りの過程を簡単に説明すると、①片方の手（A）に道具を持ち、②もう片方の手（B）の爪を切ることである。爪切り過程をより詳しく説明すると、以下のようになる。

爪切りは、①自分の身体を中心にして片方の手（A）が道具を握り、道具を操る、②並行して、もう片方の手（B）を対象として認識する、③自分の身体を中心にして片方の手（A）を、もう片方の対象として認識する手（B）に近づけていく、④対象として認識するもう片方の手（B）は、並行して自分の身体を中心にした手として、片方の手（A）を対象として認識して近づいていく、⑤両手が出会い、自分の身体を中心にした手として、また対象にした手として、両方の役割を両手が担いながら、両手が協調して実現する、もしくは両手の協調がうまくいかず失敗に終わる。

この章では、爪切り行為の基礎的要件を確認していく。具体的には、爪の成り立ち、手の

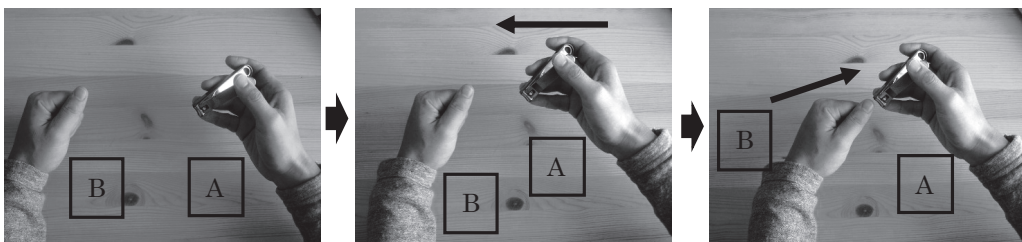


図1 爪切りの過程

成り立ち、そして他人の存在、以上の3点について確認したい。なお、本論文では、論点をしぼるために、手の爪を切ることにのみ注目して、足の爪を切ることは研究対象から外していることを了解いただきたい。

## 2-1 爪の成り立ち

この論文の先には爪切りの心理学を立ち上げることを見据えているため、爪そのものの成り立ちについての理解は不可欠であろう。本節では、爪の機能的成り立ち、爪特有の時間性、以上の2点を通して、爪の成り立ちについて確認する。

### 爪の機能的成り立ち

爪の機能について理解を得るために、内容が異なる辞書で「爪」の項目を引いてみる。

表1 爪の機能的成り立ち

|                                     |  |
|-------------------------------------|--|
| (1) 広辞苑<br>第5版<br>(岩波書店、<br>1998)   | 指もしくは足指の先端に生ずる角質の突起。表皮の堅くなったもの、人の爪は扁爪（ひらづめ）といい、他の動物には鉤爪（かぎづめ）と蹄（ひづめ）がある。また、昆虫では附節（ふせつ）の末端の小節をいう。   |
| (2) 医学大事典<br>(朝倉書店、<br>1981)        | 指趾の先端にみられる硬ケラチンからなる角質物質。薄く平坦でいくぶん丸味のある四辺形の爪は爪床の上をしっかり固定され、3辺は皮膚がとり囲む。根部は爪母とよばれ、爪の規則的な発育に関わる。爪根部にみられる白色の半月は爪半月と称される。爪はピンク色をしており、指趾の末梢毛細血管の循環量を反映している。表面の性状は一様であるが、加齢につれて爪に縦溝が現れる。成長速度は1日0.1mmである。   |
| (3) 医学大辞典<br>第19版<br>(南山堂、<br>2006) | 手足の指の末節部背面につく背面にやや隆起した四角形の板状角化物。爪を載せる爪床を覆い保護をしている。表皮中に入っている後方を爪根 nail root、その他の部分を爪体 body of nail という。また後縁を潜入縁 hidden border、前縁を自由縁 free border、両側を外側縁 lateral border という。爪床後部の爪根の下は爪が成長する部分である。爪をいれたため皮膚の隆起する部を爪郭 nail fold といいその前方爪の複縁部にある半月状の白色部を半月（爪半月 lunule of nail）と呼ぶ。爪は皮膚に由来し、扁平な爪は霊長類の特徴である。   |
| (4) 生物学辞典<br>第4版<br>(岩波書店、<br>1996) | 脊椎動物の、指趾の末端をおおう板状の角質形成物。爬虫類・鳥類・哺乳類でよく発達。哺乳類の爪は形状により扁爪、鉤爪、蹄の3種を区別する。しかしいずれも基本的には同一構造をもち、背側に堅い爪板（そうばん、爪体）、腹側にそれに比べて柔らかな爪蹠（そうしょ、爪床）がある。爪板はその基部の爪根で絶えず成長する。鉤爪は多くの哺乳類のほか鳥類・爬虫類でも見られ、爪板は前後にも両側にも彎曲（わんきょく）し、爪蹠は蹠面ともいうべき部分をなす。なお下等な霊長類には扁爪と鉤爪をあわせそなえるものがある。爪ははじめ爪を乗せる表皮前面の角質化によって形成されるが（偽爪 false nail）、後に形成部が爪母基（nail matrix）として基部に集約され、これに伴って指趾の先端に向かう方向に伸びる真爪（true nail）にかわる。  |
| (5) 生物学辞典<br>(東京化学同人、<br>2010)      | 脊椎動物の指の末節背面にある角質の板状構造物。爬虫類、鳥類（後脚のみ）および哺乳類でよく発達している。哺乳類の爪は、その形態により平爪（nail、扁爪とも書く）、かぎ（鉤）爪とひづめ（蹄）の3種類に区別される。爬虫類と鳥類の爪は、ほとんどが円錐状でかぎ爪、ひづめの3種類に区別される。爬虫類と鳥類の爪は、ほとんどが円錐状でかぎ爪のように下に彎曲している。しかし、どのタイプの爪も基本的には構造は同じで、外から見える堅い爪板と、皮膚の下に埋まっている比較的柔らかい爪蹠（爪根ともいう）からなる。爪の下の方をなす組織は皮膚の続きであって、爪床とよばれる。爪板と爪蹠後端部の爪床で爪の組織がつくられ、たえず成長している。この爪が成長する部位は爪母基とよばれ、爪が剥げ落ちた場合にもここから再生する。ヒトとサルにおいては平爪が発達し、物をつかんだり、投げたりする能力を獲得した。爬虫類、鳥類、および多くの哺乳類にある鉤爪の爪板は、前後左右に彎曲し餌の確保、闘争などに役立っている。ひづめは哺乳類の仲間である有蹄類にみられる。昆虫の脚の末端部や花卉も爪とよぶことがある。 |

上記の内容をまとめると、爪の機能的成り立ちは以下のようになる。

- (1) 爪の物質は、角質形成物である。
- (2) 爪を形成しているのは、外側から見える背側の堅い爪板、腹側にそれに比べて柔らかな爪蹠、そして爪が入っているため表皮が隆起する指の部分として爪郭である。
- (3) 爪と周辺との縁について、表皮中に入っている爪根との縁を潜入縁といい、爪の先端部分の縁を自由縁、そして爪の左右部分の縁を外側縁という。
- (4) 爪の由来は、皮膚である。爪床と呼ばれる爪の下の床をなす組織は皮膚と続いている。爪板と爪蹠根本部分の爪床で爪の組織がつくられ、たえず成長している。爪ははじめ爪を乗せる表皮前面の角質化によって形成されるが（偽爪）、後に形成部が爪母基として基部に集約され、これに伴って指の先端に向かう方向に伸びる真爪にかわる。爪が剥げ落ちた場合にも爪母基から再生する。爪の成長の速度は1日0.1mm程度である。
- (5) 他の生物との違いとして、平爪は霊長類に見られる。鉤爪は多くの哺乳類のほか鳥類（後脚のみ）・爬虫類でも見られ、爪板が前後にも両側にも湾曲する。ひづめは哺乳類の仲間である有蹄類にみられる。昆虫の脚の末端部や花卉も爪とよぶことがある。
- (6) 爪の働きは、爪を載せる爪床を覆い保護をしている。霊長類においては平爪が発達し、物をつかんだり、投げたりする能力を獲得した。爬虫類、鳥類、および多くの哺乳類にある鉤爪は、餌の確保、闘争などに役立っている。
- (7) 爪の色は、ピンク色をしており、指趾の末梢毛細血管の循環量を反映している。
- (8) 爪における加齢変化として、爪に縦溝が現れる。

### 爪特有の時間性

爪の由来は皮膚であることをすでに述べた。爪が時間とともに変化する・伸びることを、私たちは経験的に知っている。そのほかにも、爪特有の時間性が存在する。それは、先ほどまで身体の一部であった爪が、爪切りを境に身体から切り離されるとゴミとして扱われてしまうことである。爪を切ることを分岐点として、爪の位置づけが大きく変わってしまう。

先ほどまで身体の一部であったものがゴミとして扱われる時間的展開はいくつか思い当たる。髪の毛、大便・小便、目鼻耳をふくめた身体から出る垢など。この身体から離れていく現象は、筆者以上に子どもにとって興味深いものかもしれない。津守（1987）は、保育実践を描き論じるなかで、泥遊びをしている子どもにとって泥は単なる対象物ではないのではないかとこの着想に至っている。さらに着想を便に広げ、自分の体内にあり自分自身の一部であった便が体外に排出されたとき自分とは関係がない外在物となること、そして（先ほどまで自分の一部であった）外在物を触ると大騒ぎになることは、自分と外界の境界に混乱を生じさせているのではないかと指摘している。そのため、泥遊びは自分と外界の境界の混乱を取める機能を果たしていると津守は考えている。

便に似て、先ほどまで身体の一部であった爪が、爪切りを経て、ゴミとして扱われる。子どもではないであろう読者においても、この時間的展開に惹きつけられはしないだろうか。

これまで、爪の成り立ちを確認するために、爪の機能的成り立ち、爪特有の時間性について述べてきた。次の節では、手の成り立ちについて確認する。

## 2-2 手の成り立ち

「彼の手はなんて賢いだろう」、運動生理学者ベルンシュタインはとびぬけた巧みさを持つことに対して上記のような表現をしている（ベルンシュタイン、1996）。手はよく働く。手が生活のなかで担っている仕事はどれだけあるだろうか。ベルンシュタインが表現したように、手に賢さを見ることができるとし、それ以前に手の働きを鑑みれば私たちのいずれの手も賢いといえるだろう。

爪切りは手において行われる。手の爪を切る際には、手と手において行われる。この営みを担う手の成り立ちについて、手の系統発生、手の個体発生、手と身体の関係、左右の成立、以上の4点を通して確認していこう。

### 手の系統発生

日本進化学会が編集した『進化学事典』（2012）に収められている「四肢と鰭の進化、ならびに四足動物の起源」（pp362-364）に沿って、人のような四肢をもつ四足動物の起源について確認しよう。

四肢は、魚の鰭（ひれ）と共通する祖先から進化してきたと考えられている。四足動物の四肢の形態が、現生魚類の鰭と異なるのは、内骨格が基部—先端部にかけて、柱脚部、軛脚部、自脚部と分かれている点である。人の腕だと、柱脚部は上腕、軛脚部は前腕、自脚部は手に当たる。デボン紀後期（約3億8500年前）には、肉鰭類魚類と呼ばれる魚類の鰭は自脚部の構造を獲得したと考えられている。それでは、自脚部が鰭から手の形状へとどのような過程を経て変化したのだろうか。肢の中軸に対して、鰭は矢羽根状に骨が配置している一方、四足動物は肢の中軸が前側に湾曲して、その外縁部に扇状に骨が配置する。鰭から手への自脚部の変化の過程は、発掘された化石に残っている骨格の範囲では判断することができず、今後の発掘の成果によるとされている。

手の系統発生をあらためて確認すると、手は、腕とつながり、前側（手のひら側）に曲がり、指は扇状に配置していること、すなわち、手は自由度が大きいことが分かる。この大きな自由度を持つ手を、個体発生のなかで、どのようにしてうまく動かせるようになるのだろうか。次の節で確認したい。

### 手の個体発生

人の個体発生において、手は初めから賢かったわけではない。新生児にとって口や舌はうまく動かせる一方で、手や指はうまく動かすことができない。発達心理学者ピアジェ（1948）による実子の観察事例には、誕生後ただちに、授乳のために母親の乳首を唇で吸ったこと、何もくわえていないのに吸う動作（空吸い）を始めたこと、そして口の位置でたまたま静止した手や指を吸い続けた様子が提示されている。3番目の子どもローランの生後1ヶ月ごろの

事例を抜き出してみよう。

ローラン（1ヶ月1日）、授乳の直前、ほぼ垂直な姿勢で抱かれている。非常に空腹で、口を開け、頭を何度も何度も左右にふって乳を求めている。腕をバタバタさせて、その腕がたえず自分の顔にぶつかる。自分の手が一瞬右頬にあてがわれることが2度あったが、そのときローランは頭をまわして、その指を口でとらえようとした。1回目には失敗したが、2回目にはうまくとらえることができた。しかし、腕の運動が頭の運動と協応していないために、口は指をくわえておこうとするのに、手の方が離れてしまう。しかし、そのあと再び親指をくわえた。（pp52）

腕が自分の顔にぶつかってしまうことや、口でとらえようとするのに指が離れていってしまうことは、ピアジェが指摘した通り、ローランはこの時点で腕の運動が頭の運動と協応していないといえるだろう。人は通常個体発生のなかで徐々に手や腕を自律的に動かすことができるようになっていく。同じくローランが両手を動かした生後2ヶ月ごろの観察事例を、ピアジェによるシエマについての説明を避けながら抜き出してみよう（ピアジェ、1948）。

自分自身の身体に対する手の活動は、鼻や目だけに限らない。両手を組み合わせて顔全体をおおうこともあるし、また胸を手で規則的にドンドンとたたくこともある。しかし特に注目すべきは、いわば両手がたがい他方の手を発見し、撫でる場合である。・・・（中略）・・・2ヶ月4日や2ヶ月10日には、手を手で撫でるような行動が観察された。・・・（中略）・・・2ヶ月14日、左手に巻いた包帯を右手でいじる。2ヶ月17日、左手の親指を吸うのをやめさせるために、その手に紐を結びつけていた。私はその紐を引っぱると、彼は右手で何度も左手を引き寄せようとする。・・・（中略）・・・2ヶ月19日、両手を何度も組んだり、はなしたりする。（pp100）

ローランは生後2ヶ月ごろに、互いの手を発見して撫でる、もう片方の手に巻かれた包帯をいじる、片方の手でもう片方の手を引き寄せようとする、両手を組んだりはなしたりする。このような乳幼児期における両手の発生過程から、人はさらに手を自律的にうまく動かせるようになっていく。

そして、おそらく成人になり手の自律性が最も高まった後、加齢とともに徐々に手の自律性は失われていく。このような両手にまつわる発生過程は、具体的に爪切りの場面において表出する。爪切りは手をふくめた身体の自律性と並行して成り立っているからである。そのため、身体の自律性が高まれば、自分で自分の爪を切ることができる一方で、自律性が低くなれば、爪切りを他人に委ねなければならなくなる。

さて、爪切りは手をふくめた身体の自律性と並行して成り立っていると筆者は考えていることを先に述べた。それでは、手は身体とどのような関係のなかで成り立っているのだろうか

か。次の項では、手と身体の関係について確認していく。

### 手と身体の関係

手と身体の関係における特徴の一つ目は、手が私たちの肩から伸びている肢の先に付いていることである。手と身体の関係といっても、手は身体の一部である。この点はとても重要である。手と身体の関係は、目の前に離れて置いてあるコップとコップの関係とは異なる。コップとコップは、片方のコップを動かすとき、もう片方のコップには影響がない。しかし手を動かすときは必ず身体が動き、身体が動くときは必ず手は動いている。松本（2010）に倣い、コップ同士の関係を「外的関係」、手と身体関係を「内的関係」としておこう。

そして、手と身体の関係におけるもう一つの特徴は、手は身体の中心から離れた場所でありながら、動かすことで私たちの視界に入ってくることにある。哲学者で物理学者でもあったE.マッハが「視覚的自己」(The Visual Ego)と呼んだ絵がある(図2)。J.ギブソンの著書『生態学的視覚論』(1979)で取り上げられ、心理学にて広く知られるようになった。この絵は、私たちが右目をつぶり左目から見える風景の構図を描いたものである。この絵はいろいろなことを私たちに気づかせてくれる。左目から見える風景のなかに左手が書き込まれている。手が視界に入っていることは、私たちの手が肩から伸びる肢の先に付いている身体の一部でありながら、視界のなかでとらえることができる対象でもあることを示している。爪切りは、身体の一部である手を動かすことと並行して、対象として手を認識する。すなわち、私たちにおいて爪切りが可能であるのは、手が対象でありながら身体の一部でもある、という手と身体の内的関係が成立しているためであることをマッハの「視覚的自己」は気づかせてくれる。

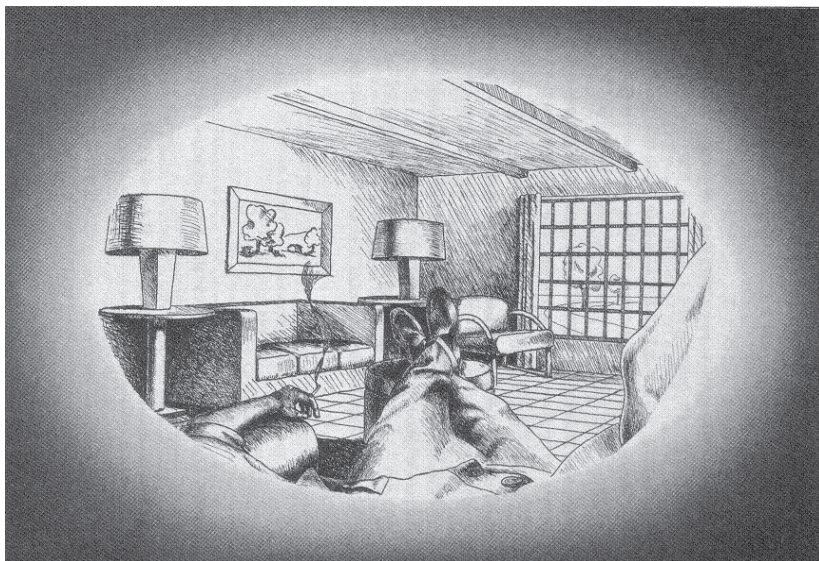


図2 視覚的自己 (Visual ego)

爪切りのような日常行為ではないけれども、私たちは片方の手でもう片方の手を、たたいたり、つねったりできる。このことは、手が対象でありながら身体の一部でもある、という手と身体の内的関係が成立していることを示している。先に紹介したピアジェの子どもであったローランが生後2ヶ月ごろから両手で行った営みは、手と身体の内的関係が成立する過程として理解することができるのではないだろうか。

私たちの日常生活を見渡せば、両手が欠かせない行為や両手を使うと便利な行為はいろいろある。ハサミで紙を切ること（包丁で食材を切ること）、ビンのふたを開けること、チャックを閉めること、大きくて重いものを持つこと、ポットのふたを押さえながらお茶を注ぐことなどが具体例として挙げられる。ただし、これらの行為において、両手は対象となるものを媒介にして協力しているのであって、手そのものが対象になっていない点で爪切りとは構図が異なっている。

爪切り以外で、身体の一部であったものを切り離していく行為の場合はどうだろうか。自分で髪を切るときは、自分の頭から生えている髪の毛を直接見て対象化することは難しい。鏡を見ながら切ることになるだろう。鏡を介して間接的に髪の毛を対象化するので、髪を切るとは爪切り以上に難しい行為といえるだろう。次に、耳垢を耳かきでこそぎとるときは、耳穴を直接見ずに、耳かきを動かしている感覚と耳かきが耳穴で動いている感覚、いわゆる「自己受容感覚」（ワロン、1954）を身体の内側から感じながら進めていくのではないだろうか。そして、耳かきでは手を対象として認識することはほとんどないだろう。

以上から、爪切りが、手は対象でありながら身体の一部でもある、という手と身体の内的関係の成立を示す貴重な日常行為であることが分かるのではないだろうか。次に、私たちの手が持っている左右という特徴について確認していこう。

### 左右の成立

爪を切るときには、前項で確認したように、手は対象でありながら身体の一部でもある、という手と身体の内的関係が成立していなければならない。くわえて、爪を切るときには、片方の手は爪を切られ、もう片方の手が爪を切るという異なる役割を担わなければならない。私たちの手が左右に機能分化している必要があるといえるだろう。

私たち脊椎動物は、武田（2001）によると、前後、背腹、左右の3軸で構成されていて、受精卵からの発生過程においては、前後、背腹、左右の順番で発生する<sup>1)</sup>。ここでいう発生とは、細胞レベルにおける発生であり、身体の物質的で潜在的な成り立ちのことである。そのため、心理学が通常注目している生まれた後に発揮される身体の機能的で顕在化する成り立ちと同じではない。とはいえ、身体の物質的で潜在的な成り立ちにおいて、前後、背腹、左右の3軸で構成されていることは興味深い。

大人において、左右の軸が成立していることは自明であろう。一方で、子どもにおいては左右の軸が成立していないようである。筆者の息子R(7歳)に、2013年2月10日、左右の腕を前後逆方向に回すことを、筆者がして見せたうえで行ってもらった。Rは複数回挑戦した



けれども、左右の腕を前後逆方向に回すことは実現せず、両腕を同じ方向（前後いずれか）に回していた。後に、同年3月1日にRが思い出したように再挑戦したけれども、左右の腕を前後逆方向に回すことは実現しなかった。同年3月20日に左右の腕を前後逆方向に回すことができるようになった。右と左が分化して、左右の腕をそれぞれ自律的に動かすこと、それが子どもにおいては十分に成立していないようである。

左右が成立していく発達過程を、山口（1992）に沿って確認しよう。3歳頃の子どもは、自分の身体の右と左の区別がまったくない段階である。具体的には、実験者が左手にVサインをつくると、向かい合っている子どもは右手でVサインを模倣するけれども、実験者が右手でVサインをつくって、子どもに左手で模倣させようとしても、再び右手でつくることがしばしばである。この理由として、利き手との関係が指摘されている。次に、4～5歳頃になると、子どもは手と足が2本ずつあることははっきり意識する一方で、どちらが右でどちらが左かを言うことができない。5～6歳頃になると、子どもは自分の手の左右を観念として獲得している一方で、行動では依然成立していない。具体的には、実験者が右手を右耳に持っていく、模倣を求めると、子どもは左手を左耳に持っていく鏡像反応を示す。あるいは、実験者が提示する動作の模倣において左右が一貫せずに、手や触る身体の部位の左右が課題のたびに変わっていく。6～7歳になると、先の鏡像反応は少なくなり、自分の身体の左右と、向き合った実験者の左右が逆転していることに気づき始める。ただし、左右の分化が確かなものとはいえない。先ほど紹介した筆者の息子R（7歳）が両手を逆に回すことができなかったことは、この段階にあったことを示していたのだろう。そして、8～9歳になると自分の身体の左右を正確に判断できるようになる。

ところで、左右の成立は東西南北という方位の成立とずいぶん異なる。東西南北は、自分の身体とは無関係に指し示すことが出来る。一方で左右は自分の身体を軸にして成り立っている。そのため、他人に左右を教えることは東西南北を教えることに比べて難しいことのように思われる。

他人に左右を教えることが難しい理由は2点考えることができるのではないだろうか。1点目は、他人の身体と自分の身体を重ね合わせようとしても、物理的に重なり合うことは叶わないからである。2点目は、人は動物であって、身体は常に動いているため、自分の身体を軸とした左右は常に動き、一方の他人の身体を軸とした左右も常に動いていて、お互いに共有できる左右軸が存在しないからである。

しかし、上記のように左右を教えることが物理的に難しくても、人は人に左右を教え、また人は人に左右を学ぶのではないだろうか。山口（1992）が指摘するとおり、自分の身体を軸にする絶対的な左右概念は、他人が登場し、その他人とやりとりをするなかで他者身体との重ね合わせが意味を持つようになって、左右本来の相対的概念になるのだろう。

次節では他人の存在について確認していく。物理的には重なり合うはずのない自分と他人の2者の身体が重なり合うことで、左右の相対的概念を身につけることが実現するならば、

2者の身体が重なり合うことが問いになる。他方、他人との身体の重ね合わせが不完全でかつ変容していくことを示す点にこそ、爪切りのおもしろさがあると筆者は考えている。

### 2-3 他人の存在

2章の冒頭で、自分の爪を切る過程を確認した。爪切りは、自らが担うほかに、他人に委ねる場合もある。具体的には、左右が成立していない子どもにおいて自分の爪を切ることはできないであろうし、高齢者において爪切りを他人に委ねていることがある。そして、他人に爪を切ってもらうことが危機的な事態になる可能性を、本論文の冒頭「はじめに」にて述べた。他人に爪切りを委ねることがなぜ危機的な事態なのか。それは爪を切る道具が刃物であることに留まることではないだろう。前の節で述べた2者の身体が重なり合うことが問いとなる。

#### 2者が重なり合うこと

2者の重なり合いについては、鯨岡の一連の著作において理論・方法論の整備がなされた間主観的アプローチを取り上げないわけにはいかない。鯨岡(1999)によると、一方の主観的なものが、関わり合う他方の主観性のなかに「或る感じ」として把握されるこの経緯を、2者の「あいだ」が通底して、一方の主観性が他方の主観性へと移動するという意味で間主観性と呼んでいる。具体例として、乳児がテーブルの上に置かれたガラガラにじっと目を向けているなかで、母親は「ああ、これが欲しいのね」と言いながら、ガラガラを取って柄のところをその子の手を持たせた事例を紹介している。鯨岡は、母親はその子がガラガラを欲していると感じたのであって、「この子はガラガラを見ている」と受け止めなかった点に注意をうながしている。つまり、母親は、それ以前から乳児を見守るなかで、「いつも、すでに」子どもの気持ちに目を向けることで、恣意的な解釈を行ったのではなく、もっと直接的に子どもの気持ちそのものを受け止めていて、それは母親に間主観的に感じられたことであるとしている。

鯨岡が間主観的アプローチによって示したとおり、長い時間付き合っていると相手の望んでいることを推測以上の確信度でつかめていると筆者も実感することがある。それから、人と人が歩道でスムーズにすれ違うような対人行為が実現していることは、日常的に間主観性といえるものがうっすらと働いていることを私たちに実感させるだろう。

後に、鯨岡(2006)が「人が人を知る」といっても、常に、また持続的に分かるといっているわけではありません」(pp126)と述べるように、間主観的体験は訪れることがまれである至福の時間であり、私たちの生活は——うっすらと働いているとしても——いつもその体験で満たされているわけではないのが実際だろう。鯨岡は、互いが重なり合わないときにも相手を主体として受け止める構えを持ち続けている養育者の配慮性や「懐の深さ」を確認しているように、2者を分断して互いが閉じてしまい「分かる」地平が消えないことを望んでいるように思える。この鯨岡の姿勢は筆者も共有するものである。そのうえで、鯨岡に

において互いが重なり合わない事態について言及しているとはいえ、鯨岡の主眼は——子どもの育ちにあるためか——分かることや通じることにあるように思える。なぜなら、2者が重なり合わないことについて言及しているけれども、重なり合わない理由について検討してはいないからである。

### 2者が重なり合わないこと

つぎに、2者が重なり合わないことについて、浜田（2002）において展開されている「他者の鏡像と自分の鏡像のちがひ」を通して検討してみよう。浜田は以下のような経験を紹介している。新幹線に乗った折、隣の人が駅弁を食べ始めた。その際、車窓に映る箸を持つ手が実際の右手ではなく左手のように見えた。これは鏡像として不思議なことではないだろう。一方で、浜田自身が右手に箸を持ち駅弁を食べ始めたとき、車窓に映る箸を持つ自分の手が、隣の人のように左手に見えなかったそうである。その理由は、隣の方は自分の身体とは無関係に見る対象でしかない一方で、自分の身体を鏡像において見るときには、先に紹介した身体の内側からの感覚である「自己受容感覚」が伴い、身体の重ね合わせにおいて自分の側に引きよせてしまうからである。

前節にて、8～9歳になると、他者身体との重ね合わせが意味を持つようになり、左右の相対的概念を身につけ、自分の身体の左右を正確に判断できるようになることを紹介した。しかし、先の浜田が紹介する事例によると、鏡像を媒介として左右を判断するとき、私たちが見ている身体が自他のいずれかによって判断が異なっている。それは、相手の身体に自分の身体を重ね合わせることに、自分の身体を生きることには違いがあるからといえるだろう。よって、左右の相対的概念というものはおそらく不完全なものなのだろう。そのことは、2者の重なり合いが不完全であることを示しているのではないだろうか。

### 痛みの共有

他人に爪を切ってもらったとき、自他の身体の違いが課題となる。爪を切られる側の視点に立てば、切る側の視点には立てないため、何をされるか分からないという怖さをぬぐいさることは出来ないと想像する。一方で、切る側の視点に立てば、切られる側の視点には立てないため、どの程度切ることを求めている、何をすることが怖いのか、言葉や身体反応で伝えられる以上のことは分からないだろう。特に、自他の身体において痛みを共有できないことは課題である。

哲学において自他の区分について検討する際、痛みについてしばしば考察がなされる。大森（1976）は痛みについて以下のようなことを記している。

他人の痛みをわたしが痛むことはない。それは事実的にできないのではなく論理的にできないのである。つまり、他人とわたしという分別に意味があるかぎり、他人の痛みをわたしが感じるということは意味をなさないのである。（pp206）

大森が展開する痛みについての哲学的考察には深く踏み込まずに、筆者が上記の記述から確認するのは、一つに、他人の痛みを私が痛むと、それは私の痛みになるため、「論理的には」他人の痛みを私が痛むことはできないこと、二つには、その論理は他人と私という分別に意味がある限りにおいて成立するという点、である。

爪切りにおいては、おそらく、子どもの頃は他人に委ねて、大人になると自分で担い、年を取るとあらためて他人に委ねなければならなくなる。この爪切りの担い手が代わっていくことは、痛みの成り立ちを変えていく、すなわち自他という分別や2者の重なり合いの意味を変えていくことが予想される。この点においても、爪切りが心の成り立ちを明らかにしていく有望な切り口であるといえるのではないだろうか。

以上、爪切りの基礎的要件について、爪の成り立ち、手の成り立ち、そして他人の存在、以上の3点について確認を行ってきた。

### 3. 爪切りのアンケート調査

この章では、前章までの理論的検討にくわえて、爪切り行為の一般的理解を得るために実施したアンケート調査について検討を行う。

#### 3-1 アンケート調査の概要

##### アンケートの実施場所

アンケートは、茨城大学人文学部で開講している主に学部2年生向けの授業のなかで実施した。場所は茨城大学人文講義棟内の講義室である。筆者は15回の授業のうち3回分だけを担当した。アンケートを実施した日は、「爪切り」を題材にして授業を行った。授業開始時に、授業の導入としてアンケート調査への協力を仰いだ。

##### アンケートの実施日

2012年12月5日。

##### アンケートの回答者

回答者は71名で、基礎情報に不備があった1名をはずした70名分のアンケートを以下では分析する。授業の出席者は74名であった。

##### 回答者の属性

回答者は女性が50名、男性が20名であった。回答者の平均年齢は20.01歳、最年長が22歳、最年少が19歳であった。

#### 3-2 アンケートの内容

アンケートの項目は、本論文巻末の「付録」を参照いただきたい。アンケートの内容は以

下の通りである。現在の爪切りについて、質問1~3にて尋ねている。質問3にて「自分」で爪を切っていると答えた人は質問4~7-aに進み、初めて自分で爪を切ったときのことを質問4~6にて、他人に切ってもら希望について質問7~7-aにて質問している。質問3にて「自分以外」が爪を切っていると答えた人は質問8~11に進み、爪を切っている人について質問8~10にて、自分で爪を切った経験について質問11にて質問している。

### 3-3 結果と考察

上記の質問項目への回答に対する結果とそれに対する考察を、現在の爪切り、過去の爪切り、将来の爪切りに分けて、以下では記していく。

#### 現在の爪切り

今現在爪に施していることを尋ねた質問1では、「爪を切ることのみ」が54名（男17、女37）、「爪をみがく」が4名（男3、女1）、「爪に装飾をする（ネイルアートやマニキュア）」は12名（男0、女12）という結果であった。

つぎに、今現在爪を切っているときの不自由の有無を尋ねた質問2では、不自由が「ある」は9名、「ない」が61名という結果であった。不自由の中身は、①巻き爪を切るのが難しいこと、②足の爪が切りにくいこと、③爪切りに失敗することがあること、以上3点であった。

今現在自分の爪を切っている担い手を尋ねた質問3では、70名全員が「自分」で切っていると回答した。なお、全員が自分で爪を切っていると答えたため、質問8~11の回答者はいない。

以上の結果から、1つ目に、回答者全員が自分で担っていることが分かった。アンケートのフェイスシートにて率直に回答することを求めたけれども、ひょっとすると他人にやってもらっていることを恥ずかしくて隠しているのかもしれない。ただ、多くの回答者が自分で担っていると理解することに問題はないだろう。

2つ目に分かったことは、少数ながら、爪をみがくことや爪に装飾を施す人がいたことである。爪は、自分にとって対象であると同時に、他人にとっては対象である自分の一部である。爪をみがくことや装飾することは、いつ始めて、それにはどのような意味があるのか。発達過程のなかでの意味を検討することは今後の課題である。

3つ目に、不自由なく爪切りをやっている人が多数派であることが分かった。不自由の中身は爪の形状や時に失敗することが挙げられていた。爪切りを自分で行うことに不自由がない人が多数派である結果は、大学生の身体機能は、左右の分化が進み、自律的に動かしていると考えられることから妥当であろう。

#### 過去の爪切り<sup>2)</sup>

自分が初めて爪を切った時期について尋ねた質問4では、「覚えていない」と回答したのが29名、小学生は29名、幼稚園は7名、幼稚園から小学校の間が3名、小学校から中学校の間が1名、その他が1名（物心ついたとき）であった。

つぎに、初めて自分で爪を切ったきっかけや動機について尋ねた質問5では、「覚えていない」と回答したのは32名、自ら切ったと回答したのは21名、必要に迫られて切ったと回答したのは13名、なんとなく切ったのは3名、併記（自ら切ったと必要に迫られて切った）1名と言う結果であった。

そして、初めて爪を切ったときの前後の様子や心情を具体的に回答することを求めた質問6では、「覚えていない」と回答したのは46名、不安・怖さを感じたのは6名、うまくできなかったことを覚えているのは6名、喜びを感じたのは3名、それ以外は2名（親がやったときのように深爪にならない期待、爪が伸びたので自分でやった）、そして解答欄が空欄であったのが7名であった。

以上の結果から、1つ目に、自分で初めて爪を切った時期は、小学生という回答が多く、幼稚園から小学校あたりであったと回答した人も少なからずいることが分かった。この結果は、小学生の時期に左右の分化が成立してくることに関連しているだろう。それから、爪を爪として認識し始めたことも関連しているのではないだろうか。今後の研究において、爪を噛み始めた時期を調査し、爪を爪として認識し始める時期を明らかにしたい。

2つ目に、初めて爪を切ったきっかけや動機への回答において、必要に迫られて切ったと回答した人のなかで、具体的には、親が爪を切ると深爪になり痛い思いをしてきたことや望むかたちに切ってもらえなかったことがきっかけや動機として記されていたことは興味深い結果である。爪切りは親と子の2者が重なり合う至福の時間ばかりではないようである。子どもの視点に立てば、親によって痛みや不満がもたらされる危機的な事態ともいえるだろう。生後ずっと他人から爪を切ってもらっていたなかで、いつから親の爪切りに対して痛みを感じ不満を抱いていたのだろうか。その時期は自我の芽生えや自他の分化を示しているのではないだろうか。

3つ目に、初めて爪を切ったときの前後の様子や心情については、やはり初めての体験ということで不安や怖さ、喜び、そして、うまくできなくなったことを覚えている人が少なからずいるようである。何事にも初体験があるけれども、爪切りにおける初体験はどのような心理的構図によって成り立っているのか検討することは今後の課題である。

### 将来の爪切り

今後自分の爪を他人に切ってもらいたい希望の有無を尋ねた質問7では、他人に切ってもらおう「希望を持っている」は3名、「希望を持っていない」は67名であった。「希望を持っている」人の理由は、ネイルサロンだと楽できれいにしてくれる、自分ではきれいに切れない、付き合っている彼女にしてもらおうと嬉しいといったことが挙げられていた。一方で、「希望を持っていない」人の理由は、自分で出来るからと答えたのが31名、他人に切られるのが怖いという回答が11名、他人の爪を切ることの難しさを回答したのは5名、自分で出来ることと他人に切られるのが怖いことを回答したのは1名、介護されているような気分になる・他人に触られたくないと回答したのは1名、そして解答欄が空欄であったのが18名であった。

大学生における身体機能の自律性は、生涯のなかで高い水準にあることが推測される。そのため、将来他人に爪切りを委ねる可能性に想像が及ばないであろうことから、多くの人が現時点で他人に爪を切ってもら希望を持っていないことは理解できる。そのうえで注目するのは、他人に爪を切ってもら希望しない理由として、他人に切られるのが怖いことや他人の爪を切ることの難しさを挙げた回答が多かった点である。身体の自律性が高い時期は、いろいろなことが自分で出来てしまい、その反面、他人に身体を委ねることが難しくなるのかもしれない。そして、身体の自律性が高い時期に至る前後、すなわち、身体の自律性に乏しい幼少期において親が爪を切ることに對して痛みを感じ不満を抱き始めるときや、身体の自律性が低下してくる高齢期において爪切りをあらためて他人に委ねなければならなくなるときの心理的構図を明らかにすることは、生涯にわたる心の変容過程や養育・介護場面での心の成り立ちの理解へとつながる多様な展開が期待できるだろう。

#### 4. おわりに

これまで検討してきたことを振り返った後に、今後の展開の可能性を述べて、本論文を締めくくりたい。

##### 本論文の振り返り

本論文の目的は、爪切りが心理学における有望な切り口であることを提示して、今後展開する「爪切りの心理学」の基礎を作ることにあった。

まずは、爪の成り立ちについて、機能的成り立ちと爪特有の時間性を検討した。先ほどまで身体の一部であった爪が、爪切りを経て、ゴミとして扱われる時間的展開は興味深いものである。

次に、手の成り立ちについて、特に、手の系統発生や個体発生、手と身体の関係、そして左右の成立について検討した。自由度が大きい手はどのようにして賢い手になるのだろうか。手は、初めから賢かったわけではなく、個体発生の過程で賢くなっていく。この手の賢さは、爪切り場面において表出するといえる。それから、手と身体の関係について、私たちにとって、手は、対象として認識すると同時に、身体の一部であることを指摘した。そして、爪切りが、手は対象でありながら身体の一部でもある、という手と身体の内的關係の成立を示す貴重な日常行為であることを確認した。さらに、爪切りに不可欠な左右の成立について、左右は発達の過程において成立していくこと、左右の相対的概念を身につけるには2者の身体の重なり合いが必要であることを明らかにした。

他人の存在について、特に、2者が重なり合うこと・重なり合わないこと、そして痛みの共有について検討した。爪切りは、自らが担うほかに、子どもや高齢者のように他人に委ねなければならない場合がある。爪切りが危機的な事態になる理由は、自他の2者における身

体の重なり合いが不完全で変容する点にあると考えていた。2者の重なり合いを検討したなかで、私たちの日常のなかで間主観性を実感することがある一方で、私たちの日常が間主観性に満たされているわけではないことを指摘した。そして、2者が重なり合わないことについて検討したなかで、見る対象でしかない他人の身体と自己受容感覚が伴う自分の身体における重なり合いが不完全なものであることを示唆した。痛みの共有については、他人の痛みは論理的に私が痛むことができないこと、ただしその論理は他人と私という分別に意味があるときに成り立つことを確認した。爪切りは担い手が代わっていく。そのため、爪切り場面における自他という分別や痛みの成り立ちが変わっていく可能性を指摘した。

爪切り行為の一般的理解を得るためにアンケート調査を実施した。現在の爪切りについて、まずは、回答者全員が自分で爪を切っていること、爪切りに不自由を感じていない人が多数派であることから、大学生において手の自律性が高いことを示唆した。次に、爪切りだけでなく爪に手間をくわえる人が少数ながら確認できたことから、爪に施し始める時期や、その意味を明らかにすることが今後の課題として残された。

過去の爪切りについて、多くの人において、自分で爪を初めて切るのは小学生あたりである結果が得られた。その理由として左右の分化や爪を爪として認識し始める時期との関連を指摘したうえで、今後の検証課題とした。次に、初めて爪を切ったきっかけや動機について、必要に迫られて切ったと回答した人において親が切ると深爪になり痛い思いをしてきたことや望むかたちに切ってくれないことが理由として挙がっていた。先の「痛み」の議論と重なり、親の爪切りに痛みや不満を抱くことが自我の芽生えや自他の分化を示している可能性を指摘した。

将来の爪切りでは、将来他人に爪を切ってもらうことをほとんどの人が希望しないという回答であった。その理由として、他人に切られるのが怖いことや他人の爪を切ることの難しさを挙げた回答が多かった。身体の自律性が高い時期は、幼少期や高齢期のように爪切りを他人に委ねている時期と異なり、他人に身体を委ねることが難しい時期である可能性を示唆した。

以上のように、爪切りをめぐる基礎的な検討を行うなかで、爪切りが私たちの心の成り立ちを明らかにする有望な切り口であることを示してきた。それでは、爪切りの心理学は今後、どのような展開の可能性があるのだろうか。

#### 今後の展開の可能性

大風呂敷を広げていることは承知の上で、今後の「爪切りの心理学」の展開可能性について思い切り語ってみたい。

まずは、「生涯発達心理学」への展開が期待できるのではないだろうか。従来の生涯発達心理学は、各世代に理念的といえるような課題を設定することや、記憶や演算といった個体の内側に帰属する能力や主観的幸福感のような構成概念をあてがい各世代の比較をすることが専らであった。爪切りという誰しも行っている具体的な行為を切り口に、乳幼児期～学童



期において未分化から分化へと展開する身体や自他の成り立ち、身体の重ね合わせが難しいとされる自閉症を抱える人たちの心の構図、思春期・青年期における対他―対自関係、成人における身体の自律性と心の孤立との関係、高齢期においてあらためて身体を委ねるケア場面の心の構図など生涯にわたり展開していく心の構図をまとめていくつもりである。ここに、新たな生涯発達心理学の息吹を感じないだろうか。

つぎに、爪切りにおける心の構図を明らかにすることは「法心理学」への貢献が期待できるのではないだろうか。本論文の冒頭「はじめに」で記した筆者が爪切りに関心を寄せたきっかけの1つは、爪切りによって虐待が疑われた事件であった。高齢者は爪切りを自分で担うことは難しいため、看護者や介護者が担うことは特別なことではないだろう。爪切りにおける心の構図を明らかにすることで、爪切り場面は危機的な事態であり虐待が疑われる可能性をはらんでいることを示すことは、法心理学へ基礎資料を提供することになるのではないだろうか。

最後に、爪切りに注目することは日常行為に注目する「環境心理学」への展開が期待できるのではないだろうか。日常行為は、厳しい生存競争を経て現存しているわけで、人と環境との関係の歴史を体現していると考えることができる。その日常行為における心の成り立ちを明らかにすることは、心理学における有効な切り口といえるのではないだろうか。日常行為に注目した研究としては、佐々木正人らのグループによって「卵割り」や「靴下履き」など魅力的な研究がすでに発表されている（佐々木、2003）。爪切りはそれらの研究の新たなバリエーションの1つといえる。一方で、佐々木らが専ら個人と物との関係に注目したことに対して、爪切りは他人が行為を構成している点にも注目している。爪切りは、筆者がこれまでに注目してきた「外出」（松本、2005）や「コーヒーを飲むこと」（松本、2007）といった日常行為の環境心理学を新たに展開することが期待できるのではないだろうか。

## 脚注

- 1) 脊椎動物のなかで、人は2足歩行であることに特徴がある。ねずみと比較すると、ねずみにとっての前後が、人にとっては上下となる。ねずみにとっての背腹が、人にとって前後になる。一方で、左右は両者とも変わらないけれども、人には手という地面から離れた足がある。このような人間特有の3軸の成り立ちについての理解は今後の課題としたい。
- 2) 過去の爪切りに関する結果は、読み方に注意が必要であると考えている。過去の爪切りに関する質問では、遠い過去のことを尋ねているため、回答の信憑性には自信が持てない。フェイスシートに覚えていないときには「覚えていない」と書くようにうながして、そのように記述した回答は多かった。とはいえ、他の回答においても記述自体にあいまいなものがあり、また言い切っていたとしても当人の思い違いであることは十分にあるように思える。過去の爪切りに関する質問については、参考情報として受け止めてもらえればと考えている。

## 引用文献

- 荒井俊行 (2010) 看護行為に関する正当業務行為性の判断基準: 「北九州爪ケア事件」控訴審判決  
日本看護管理学会誌 14巻2号 pp.61-66
- 大森荘蔵 (1976) 物と心 東京大学出版会
- ギブソン, J. (1985) 生態学的視覚論 古崎 敬・古崎愛子・辻 敬一郎・村瀬 旻 (訳) サイエンス社
- 鯨岡 峻 (1999) 関係発達論の構築: 間主観的アプローチによる ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 (2006) ひとがひとをわかるということ: 間主観性と相互主体性 ミネルヴァ書房
- 佐々木正人 (2003) 物・環境を行為で記述する試み 人工知能学会誌 18巻4号 pp.399-407
- 武田洋幸 (2001) 動物の身体づくり: 形態発生の分子メカニズム 朝倉書店
- 津守 真 (1987) 子どもの世界をどうみるか 日本放送出版協会
- 浜田寿美男 (2002) 身体から表象へ ミネルヴァ書房
- ピアジェ, J. (1978) 知能の誕生 谷村 覚・浜田寿美男 (訳) ミネルヴァ書房
- ベルンシュタイン, N. (2003) デクステリティィ 巧みさとその発達 工藤和俊 (訳)・佐々木正人 (監訳) 金子書房
- 松本光太郎 (2005) 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値: 在宅高齢者の外出に同行して 発達心理学研究 16巻3号 pp.265-275
- 松本光太郎 (2007) なぜ古野さんのコーヒーを飲む姿に僕は魅了されたのか? 発達 109号 ミネルヴァ書房 pp.78-89
- 松本光太郎 (2010) トランザクションという単位の有効性 人間・環境学会誌 13巻2号 pp.69-78
- ワロン, H. (1983) 子どもにおける自己身体の運動感覚と視覚像 浜田寿美男 (訳) 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房 pp.183-207
- 山口俊郎 (1992) 私の身体が「私の身体」であること 浜田寿美男 (編著) 「わたし」というものなりたち ミネルヴァ書房 pp.21-40
- 医学大事典 (1985) 朝倉書店
- 岩波生物学辞典 (1996) 岩波書店
- 広辞苑第5版 (1998) 新村 出 (編) 岩波書店
- 進化学事典 (2012) 日本進化学会 (編) 共立出版
- 生物学辞典 (2010) 東京化学同人
- 南山堂医学大辞典 (2006) 南山堂

## 付録

## フェイスシート

フェイスシートでは、生年月と性別の記入を求めて、アンケートの説明として以下の文章を記した。

このアンケートは「爪切り」に関するものです。次のページから始まる質問に答えてください。名前を記しませんので、誰が書いたのか特定されることはありません。率直に答えてください。また、覚えている限りで答えてください。思い出せないときには「思い出せない」と記してください。ご回答よろしく申し上げます。

## アンケート本体

アンケート本体で尋ねた項目は以下のとおりである。質問項目下の[ ]内は選択肢である。

1. 今現在、爪に施していることは以下のどれに当てはまりますか？  
[3択：爪を切ることのみ・爪をみがく・爪に装飾する（ネイルアートやマニキュア）]
2. 今現在、爪を切っているときに不自由はありますか？  
[2択：ある・ない]
- 2-a 「不自由がある」と答えた方はどんなときに不自由を感じますか？出来るだけ具体的に以下に記してください。
3. 今現在、爪切りは誰が行っていますか？  
[2択：自分・自分以外]
4. 初めて自分で自分の爪を切ったのはいつでしょうか？
5. 初めて自分の爪を切ったきっかけや動機はどんなことだったでしょうか？
6. 初めて爪を切った前後のことを覚えていれば、そのときの様子や心情を具体的に教えてください。
7. 今後他人に切ってもらいたいという希望を持っているでしょうか？  
[2択：希望を持っている・希望を持っていない]
- 7-a 他人に切ってもらいたい希望を持っている人は誰にどんな理由で切ってもらいたいでしょうか？一方で、その希望を持っていない人はなぜ望まないのでしょうか？
8. 自分以外とは具体的に誰でしょうか？
9. その人にいつから切ってもらっているのでしょうか？
10. 自分で切るのではなく、その人に切ってもらっている理由があれば教えてください。
11. 自分で爪を切った経験があれば、そのときの様子や心情を具体的に教えてください。